

\*\*\*八時間目\*\*\*

それから、一週間は大過なく時が流れた。

……いや、過ちがないとは言えない。

例えば、マリオンの【娘たち】への目つきはともいかがわしい。件の女子フィギュア選手がスパイラルやスピンをする時、開いた股間を凝視する輩に近いと思う。というか、娘に触る手つきは明らかにいやらしい。

それでも、あの【娘たち】はマリオンに従順そのものだった。表情の乏しい連中だが、マリオンを敬愛している事は明らかだ。そうになると、俺に口を挟む余地はない。昔は俺も『野蛮なイスラムの女性への虐待を改めよう！』と、やって来た連中をせせら笑っていた。『イスラムや女性に限らず、虐待の原因は殆どが貧困だ。石油の富豊かなこの国で虐待が多いと考えるとは、連中は実に馬鹿だな』と笑っていたのだ。しかし、今度は俺がせせら笑われる側だったらしい。

それでも、なにより、教育が愉しかった。

繰り返すが、【娘たち】もマリオンの異様な知性には届かない。だが、その潜在能力は均質かつ平均以上である。教員免許持ちとして、心踊らない訳がない。

だから、概ね平和で充実した時間が流れていたのだ。

M 2 3 (【娘たち】の中でもとりわけ胸が大きく、尻が張り出ている娘)が、肌が繊維に覆われた面積より、肌が空気に触れる面積の方が多い露出過多型タマゴロモを提案し、マリオンが認可作成したりはした。

が、とりあえず、荒事とは無縁な日々だった。

……いや、だって、全能ならざる人の身で、わかるはずがないだろう？  
それがやがて、大きな災いの一因になるなんて……。

\*\*\*

ある朝、俺は校庭を調査がてら散歩していた。

——この治安がまだ悪い上、あの美貌は目立つ。【娘たち】を外で走らせるのは当面、避けるべきか？ とはいえ、いつまでも屋内運動ばかりさせている訳にもな……。

この一週間、マリオンは娘たちの肉体鍛錬を重点要求してきた。今まで自分が教えられなかった分を取り戻したいのだという。だから、授業は体育三昧だった。

だがそうすると、屋内運動ばかりでは物足りなくなる。飽きさせないためにも、何とか娘たちに屋外運動をさせたいのだ、

……と思っていたら、金髪美少女……多分エムイレブンが駆けつけてきた。

「何を考えているんですかっ？ 外に出るなんて！？」

エムイレブン（らしき娘）は大声で怒鳴った。

「安心しろ。事前に地図は読み込んである。そうそう狙撃などされんよ」

むしろ、貴様の方が心配だ。そのタマゴロモ姿が人目についてはまずいだろう。

俺はそう言おうとして、ふと気付く。

校門に成人男性が二人いた。

共に黄色人種で、中肉中背、歳は三十代だろうか？

俺は少し嬉しくなった。ここのところ、女子供の相手ばかりだった。たまには男同士で話をしてみたい。

ところが、エムイレブンはその男性二人を見た途端に慌て出した。この冷静沈着な娘にしては珍しい。その裸同然の恰好を見られたらまずい自覚でもあるのかと思いきや、エムイレブンは奇妙な事を言い出す。

「……ま、マスター、楕円上の動点の媒介変数表示と極座標表示について質問があるのですが？」

「はあ？ それは授業でやればいいだろう。それに数学はマリオンの担当だぞ」

「……と、唐突に中東の宗教情勢について教わりたくなりました」

「そんな面倒臭い事をここで語れと？」

「じゃ、じゃあ、これから布団の中でくんずほぐれつしませんか？」

「貴様は何を言っているんだ？」

嫁入り前の娘とは思えぬ台詞に、俺は顔をしかめる。同時にあの男二人に何かある事を確信した。

俺が彼らに近寄っていくと、エムイレブンはあからさまに顔色を変えるが、無視。毅然として、男の一人に対面するとそいつの方から口を開く。

「kimihananimonodamitatokoronihonnzindehanaaiyoudaga」

意味不明だった。

元々俺の母語はアラビア語で、それ以外に使えるのは英語しかない。

「……『君は何者だ？ 見たところ、日本人ではないようだ？』と言っています」

隣のエムイレブンが英語訳してくれた。そう言えば、こいつらはマリオンと同じ、日本語と英語の二ヶ<sup>バイ</sup>国語話者<sup>リシタル</sup>だ。つまり、この男は日本語しか話せないなので、彼女が通訳してくれるらしい。

男は再び何かを言う。

「Wa Warewarehayuukaikahankaranihonnokodomotatiwotorikaesinikita!」

相変わらず、意味不明だった。

とはいえ、男の口調は一転して、紳士的あるいは偽善的だった。あたかも、演説の様な芝居がかった口調だった。何か意味があるに違いない。そう思い、エムイレブンを見る。

「……」

彼女はいきなり黙り込んだ。

「おい、翻訳してくれよ」

「それは……」

何故か、エムイレブンは俯く。

俺は男に直接訊ねる。

「Can you speak English? (お前、英語は話せるか?)」

「Fee? Aaa……tasika……aaa a little…… (……す、少しは……)」

彼の見事な『English』に苦笑するが、俺の発音だって褒められたものではない。俺は意識して、ゆっくりとはっきりと話す。

「I'm confused.Please.Tell me a situation. (私も混乱しています。状況を教えてくださいませんか?)」

「……Susu……Sorry.I can speak English only a few.I call a leader.Please wait a little.(すす……すみません。私は英語を少ししか話せないのです。指導者を呼んでください。少々お待ち下さい)」

そう言つて、彼らは立ち去った。

その後ろ姿は俺の知る『典型的な日本人男性 by 俺が路上で話しかけた場合』だった。つまり、英語はお世辞にも巧いとは言えないが、基本的に善良無害な先進国住人の姿だ。

「おい、あの男は日本語で何と言っていた?」

「それは……」

「ああー、別にいいんだぜ。あの男の指導者とやらは英語を話せるみたいだし。あの男の英語も意思疎通は可能な水準だ。ゆっくり時間をかければ、妙なバイアス抜きで、わかりあえそうだしな」

半ば本気のカマをかけると、エムイレブンはあっさり白状する。

「……彼は『我々は誘拐犯から、日本の子供達を取り返しにきた』と言っていました」

俺は初日の様な勢いで、マリオンの元へ向かった。

\*\*\*

こんな時に限って——あるいはこんな時だから——職員室の鍵は掛かっていた。

俺は体重と筋力で扉を蹴り破る。

マリオンはいつものように椅子に座って端末に向かって——。

ガタガタ震えていた。

「……俺をなめているのか？」俺はドスを利かせた声を出した。「あのエムイレブンにも言ったがな。連中の英語は下手糞とはいえ、意思疎通は可能だぞ。俺もこの国で暮らして長い。日本語が全くの理解不能というわけではないんだぜ」

数十秒の沈黙の後——。

弱い声でマリオンは答える。

「……連中は【娘たち】を回収に来たんだと思う」

「『回収』？　なんであんな連中が？」

「わかんない。ただ、連中が持っているプラン成果物に関する権利証は多分……本物」

マリオンは余計なことまで白状してくれた。

——『連中が持っているプラン成果物に関する権利証は多分……本物』！

俺は知らなかったが、マリオンが言うからには≪マリオンプラン≫成果物Ⅱ【娘たち】には権利証の類が存在するのだろう。そして、それはあの連中が保有しており、マリオンの後ろめたい態度からすると、そこには一定の正当性もある事になる。

「ちょっと待て。じゃ、法的な親権はむしろあの連中にあるって、お前の方が誘拐犯という事か？」

「……」

「待て待て待て。そもそも、なんであの連中がそんな権利証を持っているんだ？」

「だから、わかんないんだって！」マリオンは初めて、感情をあらわにした。「荒夏事変以降のゴタゴタで権利関係は無茶苦茶なの！　強奪された可能性すらあるんだから！」

「大英博物館みたいな事例だ？」

「あとは……プランの資金調達に債権を細分証券化していたらしいから、ゴタゴタで暴落した権利をこっそり買い集められた可能性も……」

「サブプライムローンかよ！？ 身から出た錆じゃねえかつ！！」

「しょうがないでしょ！ あたしの専門は生命工学！ まして、プラン開始時は十六よ！ お金の事なんて、わかるわけじゃない！」

振り向いたマリオンの目には光るものがあつた。

涙。

それはマリオンが再会して、初めて見せた弱さだった。

それは幼い頃、見慣れていたマリオンの姿でもあつた。

\*\*\*

「……アラブ人だからって、美味しい珈琲が淹れる訳じゃないのね……」

「インスタントコーヒーの味がごろごろ変わるか。たわけ」

あの後、俺は黙って、珈琲を注いだ。

ほぼ同時に「娘たち」が集団で駆け付けた。

そして、マリオンの泣き顔を見て、すぐに俺が悪いという事になったらしい。女子供はいつも理不尽である。

金髪碧眼美少女達が全会一致、問答無用で襲いかかってきたので、俺は降参した。二人ならともかく、三十人を相手にする事は無理だ。ましてや、俺は教え子に本気で手を挙げる事が出来ないのに、美少女達は露骨に殺気立っていた。

正直、M46（多分）が調理室の包丁を持ち出して来た時は、アッラーの下へ召されるかと覚悟した。思い出すだけで恐ろしいが、美少女達は誰一人止めなかったのだ。

俺の命が残っているのは、このマリオンが「やめなさい」と制止したからであり、俺と二人きりなのは、このマリオンが「この男と話があるから、全員出て行きなさい」と命令したからである。

今でも、廊下には大量の気配がある（呉羽の様な人外でなくとも、三十六人もいれば、さすがにわかる）。何かあれば、俺の喉笛は容赦なくかき切られるだろう。

——くそ。泣きたいのは俺の方だ。

そんな事を考えながら、二人でどす黒い珈琲を飲み合う。

「警察はあてにならないの」マリオンが先に口を開く。「あたしは元『荒夏』関係者だし、

あの娘たちの出生過程は微妙に違法だし、権利証もあっちにあるし」

「全部自業自得だよな。それ」

「しかも、ここって、L I C／低烈度紛争地域でしょ。警察も十分に機能していない」

「むしろ、幸いじゃねえのか？ 下手すれば、お前の方が刑務所行きだろう？」

「そうは言うけどね。連中は《蓬萊会》<sup>ほうらいかい</sup>っていうヤクザみたいな連中なのよ」

「《荒夏》に似たようなところはなかったのか？ 第一連中は『日本の子供達を取り返しにきた』と言っているらしいが？」

「……一応、《蓬萊会》は『人権団体』を自称している」

「で、その自称人権団体が何故現在L I Cの飛天市にいる？」

「……《蓬萊会》はA H Aの下部組織だったからよ」

A H A——【<sup>Anti Huang-xia Alliance</sup>対《荒夏》同盟】は、その名の通り、荒夏事変の際に活躍した《荒夏》に

対抗するための同盟である。秘密結社《荒夏》に抵抗する者達が結成し、荒夏の被害者や善意の協力者が集い、最終的には日本政府の公認と支持を取り付け、一大勢力となった。

最終的にはこの《A H A》がここ飛天市の攻略を達成。荒夏事変は《荒夏》敗北という形で終わりを告げた。……とされているが、マリオンの見方は違うらしい。

「あのね、A H Aは『正義の味方』とか『日本解放軍』とか言われているみたいだけど、実際にはただの暴力集団よ。被害者面をしているけど、連中だって……」

「そんな事は誰だって知っているさ。その上でお前ら《荒夏》とその蓬萊会とやらを含む《A H A》は比較され、《A H A》の方が幾分マシと判断された。お前ら《荒夏》は結局多数派形成に失敗したんだ。違うか？」

「……」

「お前も半分アメリカ人だ。C I Aみたいな組織がその『ただの暴力集団』へどれだけの援助をしてきたかは知っているだろう？ イタリアで今もマフィアが蔓延っているのも、タリバンが世界中でテロを引き起こせたのも、元々はマフィアやタリバンがファシズムやソビエトよりは幾分マシと判断されたからだろう？」

「……」

「お前は『ヤクザみたいな連中』といったが、そのヤクザとやらだって、この国では反共工作に使われたよな。……おい、中東出身の俺にこれ以上実例を羅列させる気か？」

「……わかったわよ。とにかく警察は頼れない。少なくとも今の悪玉はあたしで、善玉はあの連中という事になっているから」

——……なっているのではなく、本当にその通りなのでは？

と俺は口に出しかけてやめた。しかし、この一週間、母娘の絆を見ていなければ、俺も

マリオンを悪玉と判断したかもしれない。

「旧荒夏残党の支援は？」

「期待できないし、要請すべきでもないと思う」

「理由は？」

「下手に日本政府やA H A全体を刺激したくないから」

「なるほどな……」

俺は少し事態を飲み込んだ。

例えば、日本政府は飛天市街建設の——そして、おそらく《荒夏》そのものの——出資母体の一つだ。また、そもこの飛天市は日本国内にある。その財産を主張し、確保したい立場にある。同時に荒夏の戦闘部門を武装解除するのに忙しい。逆に、マリオンプランは直接戦闘に関わる部署ではない。潜在的な価値は凄まじく高いが、最終的にマリオン本人ごと取り込める可能性も高い（マリオンもA H Aは毛嫌いしているようだが、日本政府についてはその限りではない）。

つまり、《マリオンプラン》はおめこぼしをされているのだ。さもなければ、マリオンと娘たちがこうやってのうのうと暮らせているはずがない。

しかし、ここでマリオンが旧荒夏残党と連絡をとればどうなる？

「灰色ではなく、黒と見做される。そうなれば、終わりというわけか？」

「そういう事よ」

「だが、あの蓬萊会はこちらに接触してきたな？」

「だから、A H Aは統制がとれていないんだって。当然よ。だってあいつら所詮寄り合い所帯だもん」

「それで下部組織の蓬萊会が独断専行していると？ ……仮にそれが事実なら、A H Aは

『義勇兵』同然だな……」

マリオンは我が意を得たとばかりに頷く。

「その中でも、あの《蓬萊会》は愛国心やら民族の団結やらを騙る排外主義者よ。自称の人権団体も上辺だけの事。たまたま荒夏事変以降で、国民国家が再評価され出したから、騙されている奴らも多いけどね」

——…それでマリオンは蓬萊会とやらを毛嫌いしているのか？

あの男二人も一応は平和的にやってきた。にもかかわらず、マリオンの態度は取りつく暇もなかった。その辺りのちぐはぐがようやく解けた。

——だが、これは欠席裁判だからな。マリオンの言葉が正しいとも限らんし……。

俺は顔を引き締めて、本題に入る。

「……で、俺を呼んだ本当の理由は？」

「……『パイナップルアーミー』よ」

「なんだそれは？ 漫画か？」

マリオンもやはり半分日本人らしい。漫画を恥じらう事もなく、あっさり肯ずる。<sup>がえん</sup>

「そうよ。ベトナム戦争で勇猛をはせた凄腕の主人公が戦闘インストラクターとして活躍するの」

その時点で俺は嫌な予感がした。大体、戦闘インストラクターにいい思い出はない。

「最終話と第一話が繋がっていてね。四人の姉妹を鍛える話なの」

「……」

「姉妹は皆まだ子供だけど、その父親はニューヨーク刑事だった。そして、ある殺し屋を恐喝していた。その殺し屋は傭兵派遣の他に銃火器密輸もしていたから」

「おい、その父親……」

「父親は交通事故に見せかけて殺され、脅し取った金は遺産として、姉妹の元へ渡った。殺し屋はその遺産を狙って姉妹に襲い掛かる。——そこで主人公が姉妹と共に戦うの」

「いや、無理だろ。それ、詰んでるだろ」

俺は思わずツツコンだ。傭兵派遣やら銃火器密輸ができる殺し屋なんて、既に小規模な軍隊だ。いくら歴戦の勇者でも素人の女子供四人を守りながら、どう渡り歩けというのだ？ 大人しく金を返すのが、中策。警察に駆け込むのが、下策。そんなところだろう。「いいえ。そうでもないわ。何といっても、主人公と姉妹には父親の遺産があった。最終的に、その金でビルに工作し、殺し屋どもを一網打尽にしたの」

……なるほど、要は金か。さすがだな、金。資本主義の偉大な力だ……。

いや待てよ……。

「おい、マリオン、お前まさか……！」

「状況は似ていると思わない？」

マリオンは小首を傾げた。

「それどころか有利な要素はある。あの話だと、姉妹は四人だったけど、こちらには三十六人いる」

「俺はそんな歴戦の勇者ではないぞ」

「でも、あなたは『現代のシモ・ヘイヘ』ヤヒヤー・イブンⅡザカリヤーでしょう？」

この時、俺は自分が呼ばれた本当の理由がようやく理解できた。

**俺が傭兵だからだ。**

マリオンはあの《蓬萊会》<sup>ほうらいかい</sup>とかいう連中を俺に追い払わせたいのだ。

\*\*\*九時間目\*\*\*

俺が傭兵になったのは、それこそマリオンの好きな漫画の様な経緯だった。

ある日、父が一人の女を連れてきた。

マリオンの「娘たち」の美貌に、さらに凄味を加えたような黒髪の女だった。

それでいて、「あたしEカップだから」と明言する人懐っこさと、それを疑わせない露出と肉感を兼ね具えた女だった。まさに古の聖娼を思わせる奔放さだった。

少年だった俺は当然、彼女に心惹かれた。

……今考えれば、真面目一徹な父がそんな女を連れてきた事自体おかしかった。実際、父は彼女と深く関わらないように諭していた。

が、俺は従えなかった。

初恋だったのだ。

そして、その初恋の彼女に俺の家族は皆殺しにされたのだ。

冗談でも冤罪でもない。妹に至っては生きながらに解体された。あの女はその様をわざわざ俺に見せつけた。

動機は今でもわからない。いや……おそらく理由などなかっただろう。あれはそういう女だった。

いずれにせよ、喜劇の様な悲劇だった。それは悪夢の様な現実だった。

俺が傭兵になったのも、その女が戦闘インストラクターとして、世界を股に掛けていたからである。訳がわからないと思うし、俺も訳がわからなかった（だから、俺は三十二歳にもなって、女性不信だ。もっとも二宮朱乃<sup>にのみや あけの</sup>に言わせれば、俺はその女性不信のおかげで、性的な臭いがしないらしく、ある種の女子供には好かれるらしい）。

いずれにせよ、少年だった俺は仇討ちのために傭兵になった。

マリオンがミナの知り合いなら、その辺りの事情を知っていてもおかしくはない。

「それで……ヤヒヤーの仇討ち——成功したんでしょ？」

「……まあ、な」

「それを成功させられる人間の比率って知っている？」

「……多くないだろうな。もっとも定量的なマクロデータなんぞ、期待できんが」

「ところが、この国にはあるのよ。江戸時代には法的に推奨されていたから」

マリオンは揺るがぬ事実を突き付ける。

「1%以下よ。ヤヒヤー、あなたはそれを成し遂げた」

「……」

俺は守れなかった家族の顔を久々に思いだした。

——久々……か。

マリオンが言った1%の理由が否でも応でも理解できる。

俺は無性に苛々して、懷から煙草を取り出す。

だが、火をつける前にマリオンが口を挟む。

「煙草は駄目。副流煙があるから、あの娘たちの健康を害する」

「俺にだって、気晴らしをしたい時はある……！」

「なら、酒を用意するわ」

「俺は仮初にもムスリムだぞ！　どれだけちゃんぽらんに見えたとしても、俺が、俺の意思で、アッラーに誓った掟というものがある！」

「豆乳ならあるわ」

「……話が繋がっていないだろ……！」

そう言いつつも豆乳が豊富な理由を考えれば、マリオンの苦悩も理解できてしまう。

——すべては娘のために……か。

歪んではいても、娘を想う母の気持ちに偽りはないのだ。

——結局こうなってしまうんだよな。

リー・M・シルヴァーの『複製されるヒト』にあった通りだ。ジーンリッチに限らず、デザイナーベビーは一度でも生まれてしまえば、その流れを食い止めるのは難しい。

それは法的に難しいだけではない。技術的に難しいのではない。

倫理的、人道的に難しいのだ。

優れた遺伝子の持ち主が不平等というなら、金持ちの家に生まれる事も不平等となる。それどころか、先進国に生まれる事も、不平等になる。先進国で豊かな生活を送る者は、貧困国の住人の様に栄養失調で失明するリスク等を回避しているからだ。ならば、遺伝子操作で近眼や老眼のリスクを回避しようとして何が悪いという話になる。

勿論、遺伝子操作には失敗の危険があるし、遺伝子操作される事が幸せとは限らない。が、結局は教育環境の整備と同じだ。例えば、学校で読み書きを教える事にも、失敗の危険はある。読み書きできる事が幸せとは限らない。

しかし、今の我々は当然のように識字教育を肯定している。

かつては違った。二千年前までは、読み書きを教える事への躊躇があったらしい。あの

ユリウス・カエサルはガリア戦記で「文弱になると困るから、子供に文字を教えるべきでない」という方針の原住民を記している。そして、自身は優れた文筆家であったカエサルですら、この方針に反対していない。

つまり、当時はまだ識字教育が特殊であり、その一般化には躊躇があつたのだ。今の我々が遺伝子操作の一般化へ躊躇があるように。理由も同じだ。つまり「実行する事で、かえって良くない結果を招くのでは？」という不安だ。

が、今の我々に識字教育を受けていない者がいるだろうか？ 親が子供に文字を教えないければ、虐待の一種と見做される程ではないのか？

遺伝子操作も同じだ。

最初は抵抗があつても、それが子供の未来に有益なら、最後は肯定される。それどころか、識字教育を施さない事が虐待の一種と見做されるように、遺伝子操作を施さない事が虐待の一種と見做されるかもしれない。子供に良い教育を施す事が善行と見做されるように、子供に良い遺伝子操作を行う事が善行と見做されるかもしれない。

そして何より、親の愛は本物だからだ。

\*\*\*

その時、俺の足元から、奇妙な声が聞こえた。

「……？」

パーンパーンという、しかし、銃声ではない。少女の声だった。

「……？？？」

俺が戸惑っていると、マリオンは「……地下よ」と言い、俺に鍵を投げてよこした。

この【学園】には、俺が立ち入りを禁止されていた区画が幾つかあった。

地下区画はその典型で、今日初めて足を踏み入れると、そこには広大な空間が広がっていた。元は何かの実験施設だったのだろうか？ 区画の隅は見知らぬ機械類や大型容器が山となっていた。

ただ、現在は改修され、即席の射撃場になっているようだ。厚紙で作られた簡易標的が並んでいる。

エムイレブンはその簡易標的に銃口を向けていた。

「ばーんばーん」

そう、それはエムイレブンの声だった。

彼女は拳銃を構えながらも、何故か引き金に指をかけず、口で「ばーんばーん」と言い続けていた。

——ああ、そう言う事か……。

そこでもうやく俺は、エムイレブンが引き金に指をかけていない理由に思い至った。己の不明に恥じ入っていると、エムイレブンは気付いたらしい。

「……笑うなら、せめて他のところで笑って下さい」

エムイレブンはそう言った。だが、

「貴様は自分で馬鹿馬鹿しいと思っているのか？」

もし、教師を演じる必要がなかったら、俺は多分、この娘に敬礼していたと思う。

「俺には必要にかられているように見えるが？」

「……弾薬がないんです」

「だろうな」俺の推測はどうやらか中していたらしい。「日本の陸上自衛隊で似たような話を聞いたよ」

「それは経費の削減か実弾の管理のためでしょう？ この学園にはそもそも弾薬がない。絶無ではありませんが、訓練で消費するほどの余裕はないんです」

弾薬が豊富な学園というのは先進国なら奇妙な話だ。ただし、紛争地域にはありがちな話だし、軍事研究などに関わっている学校ならあり得る。そして、この【学園】は今や、その二つが重複しているのだろう。

——問題は補給がない事か……。

「使い勝手がいい弾薬については、ミナ先生が戦闘や交渉に消費されました。残っている残弾も絶対量そのものは多いのですが、規格が合わなかったり、試作機もいいところだったりで……」

「実戦でも訓練でも使えないと……？」

「……この街の進取の気風はやはり間違っていたんですね」

「それは違う」俺ははっきりと言った。「あらゆる状況に対応するには無限の資源リソースが必要になる。言うまでもなく、それは不可能だ。ある程度は割り切らねばならん。実際、似た条件のイスラエルはそれで生き残っているし、この飛天でもお前たちは生き残っている」

「……」

「補給が途絶えるまでは何の問題もなかったし、補給が途絶えてからも今まで生き残ってこれた。装備や思考が保守的だったら、そもそも今日まで生き残れなかったよ。貴様らの

現状そのものが、正しさの証だよ」

俺の本心からの言葉だった。

しかし、エムイレブンは目を背け、肩を振るわせた。

「……」

——しくじった。この【娘たち】は誇り高い女なのだ……。

俺は《マリオンプラン》に出会って以来の罪悪感にかられた。

一方で、エムイレブンは肩を振るわせ続ける。その度に乳房は揺れるのだが、俺はマリオンとは違う。

マリオンなら、あんな事やこんな事をして、年端もいかない少女を慰めるのだろうか（勿論、性的な意味で）。

しかし、俺に同じ事は出来ない。

ただただ、いたたまれなくなってしまう。

「……」

永劫にも思える数分間の困惑と熟慮の末——、

俺は隠し持っていた予備拳銃のU S Pをエムイレブンの前に差し出す。

「これは……」

「撃ってみろ」

「え？」

「俺の私物だ。実弾も装填してきた。お前だって、実射訓練がしなかったのだろうか？」

「……はい」

エムイレブンは右手で銃把を握り、それを左手で下から支える構えをとった。

まるで、茶碗と下皿を両手で持っている様だ。つまり……。

「カップ&ソーサーだな」

「それ、いい意味ですか？　悪い意味ですか？」

「勿論」俺は正直に言う。「悪い意味でだ」

「……これでも、我々の中ではマシなはずです。第一世代だけはミナ先生に実射訓練を受けていますから」

そう言って、エムイレブンは引き金を引く。

それなりに訓練はしていたのだろう。一発目は標的に命中した。が、その反動で左手が拳銃から離れ、二発目を打つ前に、一々握り直す羽目になっていた。

……俺は決意を固めざるをえなかった。

\*\*\*十時間目\*\*\*

「どこへ行く気です？」

とはエムイレブンの台詞だ。校舎一階で外出準備をしていた俺はため息をつく。隣にいたマリオンは何かを言いかけてやめた。

だから、俺はクラス<sup>≡</sup>A防弾装備を身に付けながら答える。

「勿論、《蓬萊会<sup>ほうらいかい</sup>》のところで」

「理由は？」

エムイレブンの語気には、俺にもわかる怒りがあつた。

「決まっているだろう。この事態を交渉で何とかするためだ」

「……意気地無し」

「歴史の勉強が疎かだな。傭兵なんてそんなものだろ？」

「……それは……」

「ましてや、俺は勇敢な男だからな。退くべき時に退く勇氣を持っているさ」

「それこそ臆病者の言い訳です」

「それは俺が決める」

「意味不明です」

「人形にはわからんか？」俺はわざと挑発する。「……だが、人間ならば、誰もがやって  
いる事だ。己の人生の責任は己にある。人生の主は自分<sup>マスター</sup>でしかない。何が勇氣も結局は  
自分で決めるしかない」

「……」

そして、エムイレブンは視線をマリオンに向ける。

「ドクター、私も付いていきます」

「えっ？」

「この男は信用できません。その上、こちらの内部情報を握っています。最悪、私たちが  
あの連中に売り渡す可能性も……」

「……………」

俺とマリオンの間に微妙な沈黙が流れる。そして、

「……いや、元々、貴様辺りを連れていくつもりだったんだが……」

「え？」

「俺日本語話せないし」

俺はアラビア語と英語しか話せない。逆にあの連中は日本語主体だ。通訳は必須だが、マリオンをうかつに前線に出すわけにはいかない。そもこの女は凄まじい運動音痴だ。

「だから、どの道、貴様に来てもらわないと困るんだ」

エムイレブンの頬が赤く染まった。

\*\*\*

現状、《蓬莱会》は飛天市のとあるビルを寢床にしているらしい。

マリオン曰く「二年前なら不法占拠と断言できたんだけど……」との事。言葉を濁したのは飛天市の不動産価格が暴落しているからだろう。つまり、蓬莱会が合法的に購入していてもおかしくない（何しろ、マリオンの読み通り飛天市が無事復興するなら、分のいい投資だ）。

俺とエムイレブンはそんなビルにいきなり押し掛けた。

中肉中背の日本人二人——《蓬莱会》受付係は露骨に驚いた。

——無理もない。

俺の様な大柄なアラブ人は日本では目立つ。それがシークレットサービスの様な黒服に身を固めて来ているのだ。黒服の下ケラス＝の防弾装備＝と機関拳銃サブマシンガンその他諸々も、きちんと見れば（あるいは少し考えれば）、明白だ。

それに加えて、エムイレブンがいる。俺はもう慣れたが、やはりとんでもない美少女だ。それも裸同然のタマゴロモ姿のままだ（信じがたいが、この薄さでありながら、並みの刃物や22口径程度は通さないというので、渋々許可した）。実際、心理的な効果は高い。

端的に言って、ビビる。

蓬莱会の男二人はビビりまくっていた。

——そうでないと困る。

こんな事態にも冷静に対応する一流揃いだと、もはや俺の手には負えない。

俺は二人をさらにビビらせるように言う。

「エムイレブン、正確に訳せ」

「了解」

『交渉に来了。英語が話せる貴様らの指導者、あるいはその代行者を呼べ。保険はかけであるが、こちらにも命は惜しい。人数を集めたりすれば、殺す。攻撃の素振りを見せれば、

殺す。五分以内に返答が現れなければ、帰る』——以上だ」

\*\*\*

俺達はそのビルの一階一室で待たされた。

もし、二階に上がって来いと言われたら、断るつもりだった。退路が確保できないのは怖過ぎる。

何しろ、《蓬莱会》構成員が何人いるか分からない。『人数を集めたりすれば、殺す』と伝えてあるせいとか、最初の二人以外はあらわれていない。が、十人やそこらではない事は想像に難くない。

だから、俺も正直ビビっている。

とりわけ、蓬莱会の男二人が日本語で何かを言い合っているのが、不安を掻き立てる。最初は超然とした態度を気取っていたが、やはり気になって小声で訪ねる。

「……エムイレブン、こいつらは何と言っているんだ？」

「……翻訳しなくてはいいませんか？」

「そのためにいつてきたんだろ」

「……下世話なので要約します」エムイレブンは心底嫌そうな声で、「第一に私の金髪の話題。第二に私の美貌の話題。第三に私の巨乳の話題。それと……第四にアラブ系であるマスターについての侮蔑です」

「……なるほどな」俺はそれが演技でない事をアッラーに祈った。「アラブ系と見抜いただけでも大したものだ」

「予備知識があったのでしよう。……加えて、『イレブンじゃない！ ニッポンジンだ！』等のよくわからない発言が多いです」

「俗語が多すぎて、翻訳できないのか？」

「それもありますけど……翻訳したくない発言も多すぎます。特にマスターへの侮蔑が……生まれた国や肌の色で……その……」

エムイレブンは顔を伏せた。どんなに気丈に見えても、マリオン謹製の純粹培養箱入り娘だ。この手の連中など、その存在を想像する事すら、困難だったに違いない。

「ふん。マリオンが言うには愛国心やら民族の団結やらを騙る排外主義者なんだろう？ ならば、こんなものだよ。アメリカでいう白人のクズの類さ」

俺は「気にするな」と言いかけた時、その男が階段から降りてきた。

中背の男は日本人の中でもとりわけ華奢な類だった。眼鏡をかけた坊ちゃん刈り。推定

三十代。明らかに冴えない風貌だが、それでも、受付二人の継る様な視線を一身に集めている。

ならば、この男こそが、蓬萊会の指導者なのだろう。

「初めまして。《蓬萊会》<sup>ほうらいかい</sup>の秋田です。この会の長を任されています」

俺はまずその発音に驚いた。見事な女王英語——<sup>クイーンズ・イングリッシュ</sup>少なくとも、俺よりはずっと上手い。「英語を話せるのか？」

「当然です」エムイレブンが捕捉する。「この秋田氏は東大出のインテリなんですから」

「東大っ……だと！」俺は絶句した。「東大って、あれか？　東京大学かっ？　この国で京都大学と並ぶ名門大学の？！」

「……御嬢さん、彼はどうかしたのですか？」

東大東大東大東大東大東大東大。

「マス……いえ、彼は日本語を扱えないので、あなたの経歴を知らなかったのです」名門大学名門大学名門大学名門大学名門大学。

「なるほど……。たしかに驚かれる事も多いですが……しかし、これは驚き過ぎでは？」

俺なんて俺なんて俺なんて俺なんて俺なんて俺なんて俺なんて俺なんて俺なんて俺なんて。

「……すいません。この人、ちよつとこじらせているんです」

三流大学三流大学三流大学三流大学三流大学三流大学三流大学三流大学三流大学。

「こじらせる……？　あの……私の語学力では意味が……」

ああああああああああ！！！！！！

「いえ、こちらが悪いのです。少々お待ち下さい」そこでエムイレブンは俺の耳に囁く。

「マスター、しっかりして下さい。この一件が済めば、シカゴ大学卒業のドクターが推薦状を書いてくれますよ……」

はっ！　そうだった。俺にはマリオンがついている。マリオンの人間性は最低だが……、

「ふっ、シカゴ大学博士は最高だぜ……！」

「……ええと、あなたは何を言っているんです？」

「いや、つまり……ちよつと驚いただけだ」

俺は頭を切り替えて、握手を差し出す。

「ああ、俺はヤヒヤー・イブンⅡザカリヤーだ」

「『ザカリヤー』<sup>ザハリアー・イブンⅡザカリヤー</sup>の息子であるヨハネ？」秋田はぽかんと口を開けた。「中東系と聞いていましたか、まさか【洗札者ヨハネ】<sup>ジョン・ザ・バプティスト</sup>を名乗っているとは……」

「……偽名だよ。言わせるな」

ついでに新約聖書——その中でも名高い福音書のネタを入れる事で、相手の教養を測る

目的もあった。

「……とはいえ、ここは非一神教圏の日本である。気付いた男はこの秋田が初めてだ。  
「よく元ネタがわかったな」

「僕がこんな活動家をやっているのも、中二病が治らなかった一種です。そりゃあ、  
福音書<sup>エヴァンゲリオン</sup>ネタには喰いつきますよ」

「？？ 何故ギリシャ語なんだ？」

「新約聖書は元々ギリシャ語ですから、原典に忠実という事では？」

「……いや、気にしないで下さい」

秋田はそう言って、俺の手を握り返した。

\*\*\*

「それで貴様ら一体何者なんだ？」「それであなたは一体何者なんです？」

俺と秋田はほぼ同時に切り出した。

「……あー、すまん」

「……お先にどうぞ。イブンⅡザカーヤー殿」

秋田が奨めるので、俺は先に手札を明かす。

「俺はマリオン——この娘たちの母親役に、この娘たちの家庭教師として雇われた者だ。  
詳しい事情は何も知らない。そちらの人間にも混乱していると伝えた通りだ」

「……只の家庭教師にしては随分荒事に慣れているようですが？」

「ああ、用心棒のまねごとを期待されてもいるらしい。が、それを知ったのも、そちらの人間と接触した後の話だ。混乱していると伝えたのはそのためだし、そもそも家庭教師の契約の範疇外だ。正当性が明確なら、むしろ、そちらに協力したい気分だよ」

俺の言葉にエムイレブンは眉を顰めるが、さすがに口を挟む事はなかった。

一方で秋田も簡単に信用はしない。

「……その娘たちの出生については御存知ですか？」

「リー・M・シルヴァーのいう《ジーン・リッチ》だろう？ 全面的な遺伝子調整の末に誕生した」

「……それが意味するところは？」

「かつてのルイズ・《<sup>ジョイ</sup>歓喜》・ブラウン以上の意味を持つ——俺の理解はその程度だよ。  
シカゴ大卒や東大卒なら、別の感想も出てくるんだろうがね」

すると秋田は悲しい笑みを浮かべる。

「僕は文学部卒業です。技術的な詳細も歴史的な意味も真の意味ではわかっていません。……状況理解の点ではドクターⅡマリオンの足元にも及ばないでしょうね」

すると、エムイレブンが小さく呟く（通訳にあるまじき態度だが、俺は見逃した）。

「己が無能を知るというなら、何故、ドクターの御意向に逆らうのです……？」

「それは勿論、君たちの回収であり解放のためです」

「解放……？」

「我々《蓬萊会》にはそのノウハウがある。元々そういう組織でもあります……えーと」

秋田は携帯端末を操作し、部屋の液晶画面に何かを映す。

動画の中では秋田と似たような男達が、皆同じ褐色シャツとネクタイとズボンを着用し、何かを語っていた。

どうも、何かの——移民計画反対の——宣伝広告動画らしい。

『我々《蓬萊会》は決して外国人を差別しているわけではありません。ただ、無思慮で無軌道な移民計画に反対しているだけです。実際、外国人労働者に低賃金長時間労働を強制していた違法経営者の告発にも関わっています。また、この違法経営者は大概不法入国とそれに基づく、窃盗、強盗、強姦、殺人の温床にもなっており……』

「という組織ですから。あ、御嬢さん。こういう広報活動に興味はない？ 僕らみたいなおじさんよりも君みたいなかわいい娘がやってくれた方が映えると……」

ここで一応、俺も口を挟む。

「マリオンは低賃金長時間労働を強制などしていない」

「では、違法な教育もしていないと？」

「……」

「聞けば、彼女たちは愛玩人形のような扱いを受けていると」

「た、只の噂だろう」

「僕も昨日まではそう思っていました。ところで、その娘の恰好は？」

「……」

——ああ、身から出た錆だ……！

俺は内心頭を抱えた。

一方のイレブンはきょとんとしている。裸同然の恰好で、男の中で、ただ一人、意味もわからず首を傾げている。

そうなれば、秋田もまた語気を強めざるを得ないのだろう。

「我々蓬萊会としては一刻も早く、その娘たちを引き渡してもらいたいところです。……ドクターⅡマリオンはどうお考えなのですか？」

「チンピラ同然の貴様らに娘は渡せん——の一点ばりだ」

「法的な権利はこちらにあるのですよ」

「蓬莱会はA H Aの下部組織と聞いた。にもかかわらず、独断専行しているとも。これが事実なら、なるほど、統制がとれていない。つまりはチンピラだ。マリオンが不安になるのも無理はない」

秋田は大きく溜め息をついた。

「それが事実だとお考えで？」

「いや……それも嘘だと思う」

「マ、マスター？」

俺の本音にエムイレブンは動揺するが、マリオンの主張には少し矛盾がある。

「蓬莱会が本当にチンピラ集団なら、権利証を手に入れる事が自体難しい。まして債券が細分証券化されていたのなら、尚の事。蓬莱会がそれらを揃えられる組織なら、そこには最低限の統制があるはずだ。そんな組織が独断専行というのは考え難い。実際、ここにも何だかんだで一定の規律がある」

「光栄です。正直、自分ではチンピラ同然だと思っていたので、過大評価な氣もしますが……」

俺は無視して続ける。

「A H A上層部が手を出さず、その下部組織の蓬莱会のみが手を出し、おまけに持参した権利証が本物なんだろう？ ならば、普通に考えて——貴様ら蓬莱会はA H Aから成果物回収を『業務委託』されて、日本政府とも黙認の了解を得ている——そんなところか？」

「『報酬は切り取り次第』という部分がないとも言えませんよ。それでも僕らは『荒夏事変』以前から、A H Aへ協力していた数少ない組織ですからね」

これは初耳であり、意外でもあった。ただし、次の台詞は予想通りだ。

「勿論、昔馴染みだから、好き勝手が許される程、A H Aは杜撰ではありません。これは僕ら『蓬莱会』への試金石でもあるのでしょうか——というね。当然の前提として、入手した情報の複製提出と不必要な外部流出の防止努力……そして何より、その【娘たち】に対しての人道に基づいた扱いが義務付けられています」

「……」

エムイレブンの顔色が変わっていく。その変化は秋田にもわかったらしい。

「御嬢さん。ドクターIIマリオンは君らを嘘で騙していた訳ではないと思う」

秋田は優しくに言った。懐柔という印象があるべきなのに、それも薄い。

なるほど、さすがに一組織の長を務めるだけの男だ。気品と知性、礼節と教養に溢れて

いる。何だかんだで、高貴な魅力があるのだ。

「僕らも情報を出し惜しみしていた。だから、ドクターⅡマリオンも、君らを想う故に、最悪の状況を前提に考え続けるしかなかった。結果、疑心暗鬼に陥っただけだよ。むしろ、あれだけ聡明な女性が冷静な判断を下せなかった程、母の愛は……」

「言われずともわかっています……！」

エムイレブンは裂帛の視線を秋田に向けた。

すると秋田は一転して、ビクビクし始める。

「あのっ、顔を近づけるのはやめてくれ！　僕は女性経験皆無な童貞で、君は凄く美少女なんだから！」

「は？」

「ぼ、僕だけではない。この蓬莱会の構成員は女性に相手にされないような社会的弱者が多い。だから、全体の童貞率は凄く高いんだよ。勿論、青森みたいなイケメン野郎には、ファッション童貞疑惑があるけどね！」

「……童貞ってなんですか？」

エムイレブンは凄い事を聞きやがったので、俺は「話を戻すぞ」と言った。言葉通りの意味もあつたし、秋田の初さ<sup>うぶ</sup>が人心をくすぐる演出に思えたからだ。

「そこまでわかっていながら、何故彼女達の仲を引き裂こうとする？　マリオンの人格に問題がないとはいわんが、この娘たちを愛している事に間違いはない」

「子供も虐待する親も、大概是子供を愛しているものです」

「ですから、私達は虐待などされていません」

「実際に虐待されている子供達も皆似た事を言うんだよ。……そして、それを信じた児童保護施設の人間が帰った後、もっと酷い虐待が行われたりする。それが事件になった後で、こう非難されるんだ——『何故、強引にでも子供を保護しなかった？』とね」

そこで俺はまた口を挟む。

「俺も最初それを疑ったんだがな。この顔を見てみる。傷一つない綺麗な顔じゃないか。少なくとも物質的には不足させていない証だろう？　それに家庭教師をやったわかったが、この【娘たち】は運動能力も学力水準も一級だ。ここまで育てたマリオンが虐待者なら、世の大半の親は虐待者になってしまう」

「ならば、尚の事、我々に【娘たち】を引き渡して下さい」

秋田はきつぱりと繰り返す。

「我々も【娘たち】の状態を確かめなければならない。あなたの言葉に嘘偽りがないのなら——と言うか、僕個人としてはその可能性も高いと考えていますので——法律上の誘拐犯とは

いえ、ドクターⅡマリオンにも人情として何らかの譲歩をすると思いますよ」

「……引き渡した瞬間に、連れ去られる事を恐れているんだよ」

「元々、誘拐犯はドクターⅡマリオンの方です。先程も言いましたが、その【娘たち】に対しては人道的な扱いが義務付けられています。その【娘たち】の意志に反し、拘束を続けるなど、ありません。僕の良心は信じなくてもいいですから、蓬莱会の規律と政治的な立場を信じてくれませんか？」

「……だが、洗脳はされるかもしれない」

「そんな技術は僕らにありません」

「……別に高度な技術を心配しているのではないさ。例えば、この【娘たち】を取り囲み、『君は騙されていたんだ』とか適当に囁き続ければいい。外界と隔離し、自分達に都合のいい情報だけを与え続けられる環境を用意できれば、価値観を変えるなど、難しい事でもない。この娘たちはまだ子供だし、それでなくても、人の心など虚ろなものだから……」

俺の声音は徐々に弱くなっていった。言うべきでない事を言ってしまった。その自覚があつたからだ。

実際、秋田は予想通りの事を言う。

「それは我々《蓬莱会》ではなく、《マリオンプラン》がやった事では？」

\*\*\*十．五時間目\*\*\*

……その通りだった。

というか、元々の俺の立場はこの秋田に近いのだ。それがこうも秋田たち《蓬莱会》に抵抗するのは……おそらく個人的な感傷故だろう。

「……」

「……！」

「……平行線ですね……」

俺が口籠り、エムイレブンが睨みつけ、秋田はため息混じりに語った。

「本来なら、公権力に任せるべきです。が、現在ここ飛天市はL I Cです。警察はあてにならず、その【娘たち】はいつドクターⅡマリオンの手で遠くに連れさるかもわからない……と」

「だから、実行使を考えると？」

「……もしや、順番を勘違いしていませんか？」秋田の声は冷たくなった。「我々はその

【娘たち】が欲しくて、権利証を手に入れたものではありません。権利証を渡されたから、その【娘たち】を探していたんです。そして、ようやく——面白くもないので過程は省略しますが、本当によろやく——見つけたその【娘たち】はイン・テリ・女の玩具にされていた。」

「なるほどな……」

秋田は実・力・行・使・を・考・え・て・い・る・の・で・は・な・い・。実・力・行・使・を・考・え・ね・ば・な・ら・な・い・の・だ・。

この《蓬莱会》は冷徹なプロ集団ではない。当人達も自覚があるのだろう。それが行方不明の少女たちを探していたのだ。いくら打算や利害を看板に掲げてはいても、義務感や義侠心が介在しなかったはずがない。

「……わかったよ。繰り返すが、俺は貴様らと敵対する気はない。むしろ、そちらに協力してもいいくらいだ。しかし、俺は《蓬莱会》について、あまりにも知らない」

「そうやって、僕から情報を引き出そうと？」

「《蓬莱会》は人権団体を名乗ってはいても、実態は政治団体だろう？　それが自己主張を恐れてどうする？」

「人権団体を名乗っているのは事実ですが、その実態は政治団体というより国粋主義団体ですよ。主張する程の政治見識はありません。あえて言えば、『日本人の権利を守れ！』という程度です」

「……では、国粋主義者が人権屋まがいの事をやっているのか？」

「元々似たようなものでしょう」

と、秋田はあっさり認める。

「国境線を定規で引かれ、それ故に国民意識の捏・造・と国民国家の形成にしくじった時に、どれほどの悲劇が待っているか——これは中東出身の方が御存知なのでは？」

「……わからんでもない」これは本音だった。俺も第三世界出身のイスラム教徒だ。欧米列強に無理矢理（あるいは意図的に！）多民族国家にさせられた苦しみは、わかっているつもりだ。だが……「しかし、マリオンは愛国心やら民族の団結やらを騙る排外主義者と言っていたがな」

「ええ。ドクターⅡマリオンの認識も間違いとは言えません」

秋田はこれも認め、悲しい目で続ける。

「例えば、先程の違法経営者の告発ですが、奴隷状態だった外国人労働者を救出すれば、その瞬間は大概喜ばれるんです。僕も心底嬉しいですよ。活動家になってよかったって。……でもね、人生はその後も続くんです。外国人労働者が母国に送還され、そこでの生活水準が日本の奴隷状態よりも酷かったら、僕らを排外主義者と罵りたくもなるでしょう」

「……悪いのは恩知らずな外国人だと？」

「違います。悪いのは貧しさです。人は弱いものですから」

ここでエムイレブンが口を挟む。

「弱さを盾にすれば、何をしてもいいという訳ではないでしょう？」

この物言いに俺は少しカチンと来る。しかし……

「倫理ではなく、事実だよ。お嬢さん、愚劣な精神論は控えるべきだ」

と、これも秋田が見事に代弁してくれた。

「人の背に翼は無く、其れ故に鳥の如く、天翔ること、不能——これは厳然たる事実だ。そこに精神論の介在する余地はない。同様に、奴隷よりも酷い母国の生活に直面すれば、他者を罵りたくもなる。人が飢えれば死ぬ。それと同じ次元の話なんだよ。事実の問題で、倫理の問題ではない。それは責めるべきではない。……だって、無意味だろう？」

「それは……」

「では、日本国内の奴隷労働を見過ごすべきか？ 否、それは否。だから、《蓬萊会》は『排外主義』とやらを続けているのさ」

「……」

エムイレブンは悔しげに口籠る。無理もない。年季も経験も違う。

「貴様らはフランスの『国民戦線』みたいな組織を目指している？」

この俺の言葉に、秋田がむしろ微笑む。

「ええ。たしかに我々《蓬萊会》とフランスの『国民戦線』の理念とは近いですね。同じ国粋主義的民族団体です。それ故に、我々も《蓬萊会》を名乗っているのです」

エムイレブスが「国民戦線？」と疑問符を浮かべるので、俺は小声で説明してやる。

「フランスのいわゆる『極右政党』だ。フランスに馴染まない移民の排斥を訴え、勢力を拡大した。党首のマリーヌ・ル・ペンなんかはジャンヌ・ダルクみたいに大人気だ。……もつとも、今では欧州議会選挙で第一党になったりしている。だから、既に『極右』とは呼べないかもしれない。実際、政策面でも穏やかな意見が増えてきたし……」

「とはいえ、油断はできませんよ」と秋田も口を挟む。「あのナチスを思い出して下さい。初期に過激な民族主義を訴えながらも、中期には数多の経済政策を成功させ、国民からの熱狂的な支持を獲得しました。国民を飢え死にから救ったのですから、当然です。同時に民族主義は薄れていました。政策実績で支持されるようになれば、民族主義は不要になる……皆がそう思ったのも関わらず、最期はあのざまです」

「……《蓬萊会》はその危険を認めながらも、民族主義や国粋主義を選んでいると？」

秋田は力強く頷く。

「フランスの『国民戦線』はフランス人である事しか誇れない社会的弱者の受け皿です。《蓬萊会》も日本人である事しか誇れない社会的弱者の受け皿になりましたかっただんですよ」

金もなく学もなく、日本人である事以外に誇れるものが何もない、そんな社会的弱者が大量の移民との競争に勝てるはずもない。仮に移民による経済活性化が起こるとしても、その時まで生き残る蓄えすらない。そんな力なき者たちの声なき声を救いたい。

……それこそが《蓬萊会》の理念だという。

「弱者である事に自覚的な弱者こそが民族主義や国粋主義に走る。現状に不平不満を抱き、人権を訴える。言論でそれが打破できないなら、変革のために武器を取る。合理性ゆえに収斂する、自然な話です。いわゆる[プロレタリア型右翼](#)というやつですね」

「では、日本人以外は？　あるいはフランス人以外は？」

「日本人にせよ、フランス人にせよ、その他の民族にせよ、そんな事以外を考える能力があると思う事自体が傲慢です。例えば、僕ら日本人は僕ら日本人が生きるだけで精一杯。八紘一字、五族協和——そんな美辞麗句に彩られた大日本帝国の大東亜共栄圏は大失敗に終わりました。だから、我々も過去を真摯に反省し、近隣諸国との接触は物流のみに止め、奴隷貿易に繋がる人材交流は控えるべきなのです」

秋田は予め用意してあったであろう答えを語った。そして、その上で「それに」と一点付け加える。

「差異主義——人間にはそれぞれ差異があつてよいという考えは君たち旧《荒夏》も同じでは？」

——俺はどちらかという普遍主義が好みなんだがな（てか、この差異主義と普遍主義の対立構造って、自由権と社会権の対立構造を移民問題にそのまま当てはめた形だな）。

とか色々と思ったが、絶対に話がややこしくなるので、思索するにとどめておいた。

移民を受け入れた後の態度は、『普遍主義』と『差異主義』の二大潮流に分けられる（と俺は思う）。

普遍主義とは、その名の通り、『俺達の国は人類《普遍》の理想に基づく素晴らしい国！　皆、俺達のやり方に従え！　異民族のやり方なんて認めない！』という主義だ。その国のやり方を移民にも強いるので、移民は元の国民に同化されてしまう。よって『同化主義』とも言える。

差異主義とは、その名の通り、『人類普遍の理想？　そんなものあるわけないじゃん』人間は皆違っていていいんだ。《お互いの《差異》を認めて行こうよ》という主義だ。その国の文化に絶対性を認めず、故に移民の同化を拒み、文化の相対的な価値を尊重する。よって『文化相対主義』とも言える。

勿論、二つの主義が並列しているだけあって、一長一短がある。

普遍主義の問題点は言うまでもない。

古代の中華帝国やローマ帝国、中世のイスラム帝国、近代の欧米植民地帝国とそれを真似た大日本帝国（最後は大失敗したが）——これらの《帝国》は皆、普遍主義を選んだ。しかし、これらの帝国に最後まで抗った者達が多い。その理由を考えれば、普遍主義の問題は明らかだ。『俺達のやり方に従え！ 異民族のやり方は認めない！』と言われ、素直に受け入れられる方がおかしい。

ただし、差異主義にも問題は多い。

端的に言って、差異主義は現実の運用が困難極まるのである。

例えば、言語だ。

俺のアラビア語はイスラム圏全域で通じる。これは中世のイスラム帝国が普遍主義で、他の言語を弾圧してくれたからだ。俺の英語は世界中で通じる。これは近代の欧米植民地帝国が他の言語を弾圧してくれたからだ。数多の帝国が普遍主義に基づき、異質な言語を弾圧してくれたおかげで、俺は遠方の人間とも意思疎通が図れる。便利だ（故に、帝国は大概普遍主義を採用する）。

これが差異主義に基づき、他の言語を弾圧しなかったら、どうなるか？ 俺は世界中の何百何千万の言語を覚えれる天才ではない。隣村との意思疎通にも支障をきたす。

言語一つでコレだ（いや、他にも語彙が貧困になる危惧があるのだが）。他にも人間が共に生きる上で必要なルールは多い。そこで一々『差異』を認めていけば、どうなるか？ ましてや、差異主義は『差別』と実に親和性が高い。

例えば、『子供を産まない女は殺せ！』という文化があったとする。普遍主義なら、『男だろうが、女だろうが、それは殺人罪だ！』とその文化を踏み躪る事が出来る。その上、普遍的な理想に貢献する意志と能力が尊重される。そこでは元が外国人だろうが、異民族だろうが、出自は問われない。

実際、前述の帝国は皆、地方の文化を普遍主義で踏み躪った。おかげで、地方の文化で得をしてきた者たちは嘆いたが、逆に地方の文化で損をしてきた者たちは喜んだ。具体的には、広域支配のために官僚制度を整備し、画一的な登用試験等を実施した。その試験を突破さえすれば、地方文化では被差別階級であった者でも、のし上がる事が出来た。

かつてのフランスもそうだった。

『フランスの普遍主義に従え！』従う意思と能力さえあれば、移民を歓迎重用します！』という社会だった。この方針でバンバン移民を招いた。優秀な移民ならば、普遍主義に従う能力も高い。必然、移民はバンバン就職先を手に入れた。逆にとりたてて能力のない

先住民族は椅子取りゲームに負けて、失業する。

……ここで国民戦線のような組織が差異主義を利用する。

『いいや、もっとお互いの差異を認めていこうよ。人は皆違っていてもいいんだ。優秀な移民がフランスに従う必要はない。彼らには母国で活躍してもらおう（そうすれば、椅子取りゲームに負けた先住民族フランス人も返り咲けるよ）』

という論法である。

今の秋田の論法もそうだ。

椅子取りゲームに負ける日本人のために、差異主義で外国人を差別している。

しかし、エムイレブンは言う。

「旧《荒夏》とあなたたち《蓬莱会》を一緒にしないでください。たしかに旧《荒夏》も差異を認める集団でした。しかし、その基準は『民族』ではなく、『個人』です。下らない民族差別をするあなた方とは違います」

「ほう、下らないと？」

「当り前ですっ。『日本人である事以外に誇れるものが何もない』ですって？ たまたま、日本に産まれたからと言って、それを誇りにする事自体が間違いです。自分で努力し獲得したものこそを誇りとすべきです」

秋田は苦笑した。俺は俺で頭を抱えなくなった。

「それは努力できる強者の独善だよ。君の様に努力できる恵まれた環境を与えられた特権階級の傲慢だ」秋田がまたしても俺の想いを代弁してくれる。「《蓬莱会》はね、努力する事自体できない弱者のために国粋主義を掲げているんだ」

「日本の様な先進国に生まれて、努力する事ができないなど、自己責任です」

「なら、三歳の僕は心臓病で死ぬべきだったと？ 自助努力で病を克服できなかったのは自己責任だと？」

「え……」

「正確には小児急性熱性皮膚粘膜リンパ節症候群——通称川崎病による冠動脈障害だった。川崎病の原因は詳細不明だ。けれど、ITPKC遺伝子の一塩基多型とカンジダ類が多い中国東北からの風による感染などが重複する事で、全身の血管、中小動脈への自己免疫が誘発される疑いは濃い。予め遺伝子検査を行い、十全に注意していれば、発病を回避する事も出来たかもしれない。……ところで聞いてみるけど、三歳の僕がそれを出来なかったのは自己責任？」

「……」

「僕が生き残れたのは『国民』皆保険で医療費を捻出できたからだ。日本が君の言う民族

差別を貫き、外国人よりも自国民に社会保障費を優先配分してくれた。だから、僕は生き残れた。……中学の頃、気まぐれに計算して愕然としたよ。同じ金があれば発展途上国の病人を何名も救えたんだ。僕はこの国の民族差別のおかげで生き残れたんだ」

……これは善良な先進国住人なら、誰もが思い至る事だろう。秋田のように明確に自覚する機会は少ないかもしれない。だが、清潔な水、豊富な食料、空爆のない社会と銃撃のない学校に恵まれていれば、薄らと自覚できるはずだ。そんな特権を享受しながら、『民族ではなく個人として』などとは口にするのは、余程の愚者に過ぎない。

「いいや、僕だけじゃない。介護が必要な日本のお年寄りはどうなる？ もし、発展途上国の住人と平等に福祉予算を分け合えば、多くの途上国の住人が救われるだろう。でも、日本のお年寄りには？ 莫大な医療介護費用があつてこそその長寿だ。途上国の住人に費用を分け与えれば、その瞬間に日本のお年寄りの大多数は死ぬことになる。僕はあまり老人が好きではないけどね……『途上国の人命を救うために死んで下さい』とは言えないよ」

——構造問題だな。

と、俺は思った。

実際、大学の頃、俺も経済学の教授に尋ねた。『ナショナリズム国粋主義とは弱者救済制度では？』と。……その教授は『条件付きながら肯定だ』と答えた。

結局、皆、同じような結論に至る。何しろ、先進国における弱者、例えば、老人一人を介護する予算で、発展途上国の病人一万人を救えたりする。国粋主義を否定するならば、先進国における弱者救済など、即刻やめるべきなのだ。そして、先進国の老人一人を見殺しにした予算で発展途上国の病人一万人を救うべきなのだ。

しかし、現実には<sup>ナショナリズム</sup>国粋主義によって民族差別は行われている。だから、先進国では弱者救済が行われている。同じ予算で、より多くの発展途上国住人を救えるにも関わらず……。しかし、あのドクターIIマリオンは『弱者は死ぬ』と考えているかもしれない。ヒトは人種や民族や宗教ではなく、個人として評価されるべきと。僕のような弱者は三歳の時におとなしく死ぬべきだったと。その金でアフリカの難民が救われるべきだったと」

「極論です」

「……例えば、君たちを生み出すために損なわれた命——これもドクターマリオンなら、淘汰されるべきと言うでしょうが、僕らは重大な関心を払っています」

「それは……」

「実際、ドクターIIマリオンなら、人種や民族や国籍や宗教ではなく、個人として、世界中で通用するでしょう。弱肉強食の競争原理で生きていけるでしょう。だから、民族差別など言語道断、以ての外と言えるでしょう。でもね、日本人のほとんどはそんなに強く

ない。ましてや、僕らはとりわけ弱い。——だから、抗うのです」

「……そこで、俺はずっと気になっていたことを聞いてみる。」

「東京大学卒業者が弱者か？」

お前もマリオンと同じ側の人間ではないのか？——そういう質問だった。

しかし、秋田は首を横に振る。

「この国では学歴は大した意味を持ちませんよ」

「先進国で学歴が意味を持たないだと？」

「ためにしに日本の書店に行ってみて下さい。中国や韓国の悪口を書かれた本で一杯だ」

諷意なのだろうか？ 俺は急な話の転換に少し混乱したが、一応つきあってやる。

「隣国を悪く思うのは、国民自然の性だ。そもそも、相容れないからこそ、間に国境線を引いている。本当に仲が良ければ、とつくに互いを併合して、一つの国になっている」

「では、中国の書店に日本を罵った本がありますか？」

「……いや、なかったな……」

「何故です？ 国民自然の性に反するのでは？」

「……中国で書店に行くのは国民と言うより支配者層だ。隣国との貿易による利益を実感できる階層だ。国民自然の性よりも、貿易利益による富を選ぶさ」

「その通りです。十代の頃、僕もこの目で見てきました。中国の書店は日本を褒め称える本で一杯でした。路上の雑誌店や地下鉄やバスのテレビでは日本を貶す言葉ばかりだったのね」

「……」

「社会経験が皆無な学生にもわかりましたよ。……ああ、中国では貿易利益を実感できる支配者層と、それが実感できない故に自然の性に基づき日本を嫌悪する国民が、くつきり分かれているのだと……」

「中国は極端だが、異常でもない。発展途上だし、成熟すれば、極端さも緩和されるさ。むしろ、異常なのは日本の方だろう。書店に通う階層が隣国を嫌うなど……」

「つまり、日本では支配者層と国民にそれ程の断絶がないのですよ。勿論、両者の距離が皆無という訳ではありません。ただ、書店に通う階層であっても、隣国嫌いにならざるを得ない国民感情に共感できる。それくらい、日本の格差はまだ小さいという事です」

「……だから、最高学府の卒業生であっても、底辺国民感情に左右されると？」

秋田ははっきりと頷いた。

多くの国でこういった国粹主義に走るのは社会の底辺だ。先に述べたように、底辺層は移民との競争に敗北し易く、貿易による利益を実感し難い。

ちょうどマリオンとは逆なのだ。マリオンは米国外交官の娘——まさに世界的上流層として生まれた。豊かな環境で育ち、恵まれた才能を育み、国際市場で勝ち抜ける力を得た。当然、移民との競争に敗北するはずがなく、貿易による利益も実感できる立場にある。：

：国粹主義に走る理由などまるでない。

秋田とて、一流大学を出た男である。立場としてはマリオンに近い。国際市場で荒稼ぎできる男のはずだ。

しかし、それがこの日本においては違うという。最高学府を出たこの秋田であっても、底辺層と心を通わせ、それ故にこんな集団に埋没するらしい。

正直、俺にはそれがいい事とは思えない。巨視的に考えれば、支配する側と支配される側が曖昧になれば、意思決定に支障をきたす。微視的に考えても、秋田個人は支配者層になりえる人間でありながら、今ここで泥水を啜る羽目になる。

だがそれでも、秋田は明言する。

「そして、僕はそんな日本を守りたかつたんです」

「だから、蓬萊会はかつてA H Aに参加したと？」

「ええ。負けましたけどね」

「負けた？ 荒夏は滅んだ。反荒夏同盟A H Aの目的は達成されたろう？」

「荒夏は解体されましたが、その人材は飛天市で再雇用され、行政特区の地位も保全されますよ」

そこで俺は息を飲んだ。慎重に質問を重ねる。

「……ガセではないだろうな？」

「他ならぬA H Aでの決定です。ドクターⅡマリオンのような優秀な人材は積極的に活用したいとの事です。組織は潰せても、時勢には抗えぬという事でしよう」

「軍事的に勝利しても、政治的には敗北した——と？」

秋田は悲しげに肯ずる。

「さらに技術的な事を言えば、第二次世界大戦終了時と同じです」

「さしずめ、マリオンはフォンⅡブラウンというわけか？ それこそ、ナチスに協力し、V 2 ロケットでロンドン市民を虐殺しながらも、戦後その技術をアメリカへ売り込む事で高い地位を手に入れたように」

「というより、7 3 1 部隊の石井四郎ですね」

「……何だ、それ？」

「御存じありません？ 第二次世界大戦時の大日本帝国陸軍に存在した研究機関——正式名称は関東軍防疫給水部本部、7 3 1 部隊はその通称、石井四郎はその初代部隊長……」

「防疫給水……だと？」

俺は口の奥で苦い味がした。

「はい。そして、生物兵器開発のための人体実験、人体解剖、その証拠隠滅のための虐殺等の疑いがかけられています。それも極めて濃厚にね」

「……」

「人口密集地に——それも非戦闘員の真上に原子爆弾を落とす様な時代です。ぶっちゃけ限りなくクロです。が、フォンⅡブラウンほど著名でない理由は、それこそ中東出身者の方がご理解いただけるかと」

「イラクの化学兵器Chemicalのような話か……」

イラク戦争はフセイン政権の大量破壊兵器——B C兵器の開発製造使用を理由として、アメリカが始めた。しかし、終戦後、その確たる証拠が出なかった事が話題になった。

——確たる証拠など出るはずがないさ。

少し考えれば、わかる話だ。フォンⅡブラウンが関わったロケット兵器や核兵器と違い、一般にB C兵器は大規模な設備投資を必要としないし、大規模な破壊痕跡も残存させない。ただの医学設備とB C兵器の開発工場の区別は難しいし、風土病による被害とB C兵器による被害の区別も難しい。物的証拠など、見つかるはずもないのだ。と、なれば、証言や文献が頼りになるが、国家規模の組織になれば、その程度の捏造は容易いものだ。ロケット兵器や核兵器を捏造する事が難しいのと同じようど逆である。

（余談だが、だから、アフリカ貧困国では『エイズやエボラは白人のウイルス兵器だ！』等の話が蔓延るのだろう。例えば、小さな村に防護服に身を包んだ白人集団が突然やってきて、『何か』を噴霧した後、その村で病が流行れば、疑心暗鬼にも陥る。……実際に、『何か』は只の抗ウイルス剤で、まだ潜伏期間で自覚症状はなかったが、ウイルスが検出されたから、被害を抑制するために噴霧されたのだとしても、だ）

仮に、薬物を用い、拷問にかけても、真相には辿り着けまい。自白は得れるだろう。が、物証なしでは、それが苦し紛れのでっちあげ、あるいは模造記憶の可能性も高いのだ。

「ああ、この石井四郎氏は戦後何のお咎めもなかったそうですよ。民主的に選ばれた東條英機などがA級戦犯として、殺されているにも関わらずね」

「実験記録をアメリカに引き渡す事と引き換えに、か？」

「ま、つまりはそういう事らしいです」

——《マリオンプラン》もこれに相当するわけか。

「このようにドクターⅡマリオンの実績ですら、受け容れられる。にもかかわらず、僕ら蓬萊会の理念は退けられる」

秋田は悔しげに呟いた。怒りを諦めの中に隠している。

A H Aは一枚岩ではない。そして、秋田達蓬萊会の発言力は決して強くない。不本意な決定にも、異を唱え続ける事は出来なかったのだろう。

「——日本人は日本人であるというだけで尊重されるべき、弱くても愚かでも醜くても、同胞なら、助け合うべき、よそ者よりも先に我々を救ってくれ——そんな理念はもう時代遅れなのでしょう」

見苦しい——とエムイレブンは小声で呟いた。

大声だったら、秋田は言い返したはずだ。

それが強く賢く美しい人間の傲慢なのだと——。

エムイレブンに限らず、『マリオンたち』にすれば、無能な自国民よりも有能な外国人を優遇するのは自然なのだろう。優遇して欲しければ、有能になればよい。そのために自己責任で自助努力すべき。強く賢く美しい人間になればいいと言うのだろう。

だが、秋田達蓬萊会は『それは自分には無理だ』と自覚した人間の集団なのだ。それを悟達と呼ぶか諦観と呼ぶかは人それぞれ……いや、仏教徒なら、それは同じものだともいうだろうか？

俺はこの秋田という男に惹かれている自分に気付いた。

——ああ、これは『マリオンたち』がいるからか……

俺は自分をそこまでの無能とも思っていない。なのに、自分たちを弱者と規定する秋田たち蓬萊会に惹かれていた。それは結局

——『マリオンたち』から見れば、俺も秋田も蓬萊会も、すべて平等に無価値だからだ。

愚かで醜い、至弱き只人の群れだからだ。

この秋田も蓬萊会もどうしようもない無能集団というわけではあるまい。さもなくば、仮にも組織を成せるはずがない。

だが、強く賢く美しい《理想の女》たちからすれば、やはり等しくゴミクズなのだ。

「すべては時勢が読めなかった僕の不明が原因です」

秋田は言う。

「しかし、だからこそ、僕に付いて来てくれた皆を見捨てる事はできません。《マリオンプラン》回収に成功すれば、彼らへの保障もできる。だから、そこだけは譲れません」

それが負け犬の矜持なのです。

俺は立ち上がった。

付き合いきれない———そう言い放とうとしたが、口は動かなかった。

後から考えれば、恐れていたのだろう。

秋田という男の生きざまに惚れてしまう事を……。

だから、決別の意図を以って吐き捨てる。

『「ヤヒヤー・イブン」ザ・カリヤー』の名を聞いた時、貴様は洗札者ヨハネを連想した。だが、マリオンはイブン・ザ・カリヤー・アル・ラーズイーを連想したよ」

「アル・ラーズイー？ ああ、ラーズイーの事ですか……」

秋田は秋田で諷意を解いたらしい。

「そうか、同じ名を聞いた時、僕は預言者を、ドクター・マリオンは哲学者を想った……」

——俺も甘いな。まるで懦弱な文学青年だ。

そして、この秋田はまさにその文学青年の成れの果てなのだろう。

「なるほど。僕は弱さ故に神を想う。しかし、ドクター・マリオンは強さ故に人を想う……」

……水と油なわけです」

エムイレブンは顔をしかめていた。

意味がわからないのだろう。だが、わからなくていいと思う。

——生き方を変える事が出来ない三十路過ぎの事など、希望あふれる十代の娘がわかる必要もない。

\*\*\*

蓬莱会から【学園】に帰る最中、俺はマリオンに電話していた。

「ああ、そういう事だ。交渉は決裂した。俺たちは無事に返されたが、蓬莱会ほうらいかいは遠からず攻めてくる。ん……そうだ。物理的軍事的な意味でな」

そう言って、俺は通信を切った。

しかし、隣のエムイレブンは怪訝な目で睨んでくる。

「断定しましたね？」

「秋田は勇者だ。来るさ」

「あれは自己陶醉しているだけなのでは？」

「だから、勇者と言っている。善行が偽善を必要とする如く、勇氣は陶醉を前提とする。」

自動販売機で珈琲を買う事を勇気とは言うまい？」

「それは……」

「逆に言えば、勇気に依存しているんだ。それはプロではない。勝算はあるさ」

——もつとも、それは当人達が一番わかっているはずだが……。